

第四話 口裂け女

渡辺公暁

1

太田は帰り道を急いでいた。歩くにつれ身長の変わる影を、街灯が路面に二つずつ作っている。

信号は赤かったが、左右に車は見えない。太田は速度を緩めず、道路を渡って角を曲がった。その足がぴたりと止まった。止めてしまってから太田は、不自然に見えるだろう自分の行動を悔いた。

二本先の電柱の陰に、なにものかがたずんでいた。とりわけ強い風が一瞬、ふう、というように吹き、その女の長い髪を漂わせた。

——通り魔？

最近このあたりに出没するという通り魔のうわさは、太田もきいていた。妻が回覧板を見ながら、女の通り魔なんて珍しいわね、とつぶやいていたのを覚えている。太田はその特徴を思い出そうとし

た。

——女、は合ってる。長身で、

電柱の陰にいるその女は、太田と同じぐらいには背丈があった。

——赤いレインコートを着て、

女はこれといった防寒具を身につけていなかった。まとっているのは、赤い、体の線を隠すような、光沢のある服だった。太田にはそれがレインコートに見えた。

——赤いハイヒール。

太田は注意深く、女の足元に目をやった。すると、それに合わせるかのごとく、電柱に隠れていた足が、前に出された。女が一步、前に踏み出したのだった。

——赤いハイヒール！

その色は薄暗がりにも鮮やかに映え、太田の目に飛びこんできた。裾の広がった赤いズボン、太田の若いころに流行したはずだった。赤だらけの趣味の悪い服装は、濃淡の差異でかろうじて調和を保っている。

女はゆつくりと太田のほうへ近づいてくる。太田は鞆を握りしめた。今の太田にとって、自衛の武器はそれしかない。防犯ブザーは、妻と息子には持たせていたが、まさか自分が襲われようとは、夢にも思っていなかったのだ。

太田はそろそろと数歩あとずさると、向きを一気に反転させて、女から逃げようとした。

目の前に、いまは後ろにいるはずの女の顔があった。目元まで隠す長い黒髪、そしてその下を覆う大きなマスク。太田は鳥のような叫び声を発して、黒の革鞆を振り回した。手ごたえは一回だけで、そのあとは鞆の重みすら感じられなくなった。足元に散らばる書類を見て、太田はことの恐ろしさの、ほんの一部を理解した。

太田の鞆は、底をきれいに切り取られていたのである。愛読していた剣豪漫画の世界が、目の前にあった。女の白い右手には、鎌が握られていた。

合わない歯の根をむりに押さえつけ、太田は女をにらんだ。しかし、圧倒されているのは自分のほうであることがわかるだけであった。路地は赤で充満しているようだった。

そして女は、マスクの中で言った。確かにその女の声であった。

「私って、きれい？」

太田にはもう、自分の運命がわかっていて。口裂け女、子供のころに流行した怪談のすじを、太田はなぞっていたのだった。

——答えなくては。

怪談では、この問いに速やかに返答しなければ、殺されてしまうことになっている。

——どう答える？

特定の、正しい返答があったはずだった。「はい」でも「いいえ」でも、結果は死。

女が一步、太田に近づいた。ヒールが、制限時間を示すかのような音をたてる。

そのとき頭に浮かんだのは、ポマードという単語だった。三回そう唱えようと、口裂け女はなぜか逃げていく。

ある意味で太田の精神は、そのうわさが流行した当時のものに退行していた。そうでなければ、相手が怪談に出てくる化け物だなどという発想は、一顧だにしなければならなかったらう。

太田は逃げることも、死ぬことも考えず、口を開いた。恐怖ゆえの行動だったが、太田自身はその恐怖に気づいていなかった。

「ポマ」

続きを言うことはできなかった。たった二音のあいだに鎌で裂かれ、断面の筋肉を露わにした頬から、ちぎれた舌の一部が、こぼれて落ちた。書類を血で染めながら、舌は芋虫のように、しばらく痙攣していた。唇を結んでも、口の中に乾いた空気が入りこんでくる。

激痛にのたうちまわる太田を、女は見下ろした。太田の首は女の足元にあり、

女の右手には鎌があった。女は無造作に、鎌を下に放った。回転しながら鎌は空気を裂き、次に太田の首を裂いた。血はいつそうせいたくに噴き出し、路面に黒く広がった。

殺人のあとも回転を続け、手元に飛び戻ってきた鎌を、女はやはり無造作につかんだ。白く細い手に、鎌から一滴の血が垂れた。

数十年分の後悔や懊悩が、太田の額には刻まれていたが、それは耳まで裂けた頬のせいで、印象を弱められていた。固有の人生を上書きし、口裂け女の逸話に加わる数字に変えてしまい、最悪の種類暴力だった。

路地の入り口で悲鳴があがった。口裂け女はゆつくりと振り向いた。目撃者は取り落としたスポーツバッグを拾い上げ、逃げ出した。

通り魔のうわさはいつそう補強され、ある種の人々を苦しめるだろう。口裂け女はその場を離れた。あとにはつむじ風

だけが残り、太田の死体は意味を収束してしまった。

2

初詣から帰った奈留は、暖房を入れてテレビをつけ、届いた年賀状の分類をした。二宮家からのものは一通だけで、印刷された文章は月並みなものだった。友人からのものは少なく、ほとんどは携帯電話のメールで済ませてしまっている。奈留が送ったのは、親族を除けば数通だった。その中には金之助も含まれていた。ただし、年賀状にありがちな、「今年もよろしくお願ひします」といったことは、迷った末に書くのをやめ、ただ新年を祝う言葉だけを並べた。

今年も、去年と同じように――奈留はそうあつてほしくはなかった。都市伝説という影がついてまわるならば、新年が来ようと、これからも脅えて暮らさなくてはならない。

現代に生きるために変形した怪談、都

市伝説。奈留を巻きこんだ事件はどれも、都市伝説そのものが実存する脅威と化す、奇怪なものだった。

携帯電話が震えた。同級生の松沢からだった。わざわざメールではなく電話をよこした理由を考えながら、奈留は居間を出て、電話をとった。

「美紀ちゃん？」

美紀というのが松沢の名前である。

『いまだいじょうぶ？』

「うん。あ、あけましておめでとうございます。どうしたの？」

『おめでとう。ね、明日予定なんて入ってないよね』

明らかに奈留の都合をうかがっている。

「別に。寝てるつもりだったよ」

『えらい！ でも寝てると太るよ。出歩いたほうがいいよね。ね？』

「どっか連れてきたいなら、はつきり言つてよ、はつきり」

松沢はだいぶはしゃいでいるようだった。少し甘酒が入っているのかもしれないと、

奈留は壁にもたれながら思う。

『実は一、明日、SUNテレビでイベントがあつて。六十時間テレビの生放送のあれ。芸人さんとかマイナーのバンドとかいっぱい出るやつ』

「へえ。見に行くんだ？ でもそういうのって、抽選とか招待券みたいのがあるんじゃないの？」

『抽選は通つたのよ』

「そつか、やつたじゃん。何人ぐらいで行けるの？」

『四人までだつて。で、メンツはこれから揃えるとして、ここで一つお詫びがあります』

ささやくように松沢は言った。

『抽選の申し込み、にやるの名前で出しちゃつた。ごめん！ つていうか、友達の名前使いまくつて、いっぱい応募しちゃつたから。倍率高そうなんだもん』予測の範疇だったので、奈留はため息をつくだけに収めた。にやる、というのは奈留のあだ名である。

『えへ。だいたいわかってたでしょ?』

「前も似たようなことやってたもんね。そういうのつてさ、ほんとはなんかの犯罪なんじゃないの? 名義貸しつていうか」

『怒らないでよ。あ、そうだ。前に貸したMDに入ってた、スシテンプルつてバンド、覚えてる?』

奈留は記憶を探った。ぜったい気に入るはずだからと、松沢から押しつけられたその曲は、確かに奈留の琴線に触れるところがあつた。松沢は他人の趣味を延長するのが得意で、その才能が少々 of 逸脱も免罪している。

「あれでしょ、外人さんがヴォーカルやってるのに、歌詞が古文っぽいやつ。ひよつとして、出るの?」

『そう! 生ライブしてくれるわけ。ね、行きたくなつたでしょ』

「なつた」

『勝手に応募した美紀ちゃんに感謝する?』

「するする。さすが松沢美紀、さすが学級委員長、えーと懸賞の鬼、あとは…

…」

双方が笑い出して、あとは雑談になつた。

3

金之助は遅いシャワーを浴びてから、居間のソファに深く腰かけた。元旦の二宮家には、作家である直矩を訪ねて、大勢の来客がある。その接客に忙しかつたせいで疲れがたまり、今日起きたのは昼過ぎだつた。

「おはよう」

直矩がティーカップを一つだけ持って、キッチンから出てきた。昨日の和服とはうつつかわつて、ジーンズに紺のセーターというラフな格好だ。

テーブルの上にはコンビニで買った弁当の残骸がある。直矩が食い散らかしたものだつた。

「朝飯も昼飯も用意してないからな。自分で買ってこい」

直矩はそう言うと紅茶をあおつた。金之助は着替えて外へ出た。

正月らしく、近所の家はどこも門松を飾っている。もちろん金之助の家の門にも、そこそこ立派なものが置いてある。設置したときの苦勞を思い出すと、片付けも自分の仕事であろうということが付随して、金之助は憂鬱になつた。ふだんなら庭師に任せるところだが、そういう人員は松納めの日には来ないことになっている。

大通りに出ると、しめ飾りをバンパーにつけたトラックが、信号をぎりぎりでかわして走つていくところだつた。金之助はジェットババアのことを考えた。あのような事件がまた起こる前に、なにかをしなくてはならないと思つた。金之助は拳を握つたが、そこから先の展望はなかつた。

コンビニではなくスーパーマーケットに寄り、弁当と缶の緑茶と蜜柑を買つて、金之助は家に帰つた。直矩は大きいほう

のソファに寝そべって、テレビを眺めていた。

「おかえり」

「……ただいま」

テーブルに置いた蜜柑の袋を、直矩は当然のように開けた。

「六十時間テレビだとさ。大晦日の朝から始まって、今日の夜までやってる」

画面では、そろって赤い服を着た少年たちが踊っている。

「……おもしろい？」

「ああ。正月早々つてやつだ。金之助、いちおう出かける支度をしておけ」

何のことかわからなかったが、金之助はとりあえず、弁当の咀嚼を止めた。

テレビでは音楽が終わり、映像が切り替わった。ドラム缶ほどの大きさの、透明なアクリルの箱いっぱい、金属が詰められている。カメラが引いて全体を映す。箱は屋外ステージの上に、いくつも重ねて置いてあり、建物のもようであった。ステージの下の人工の池に、奇妙な形が

揺れて投影されている。

「……なに？」

「プルトップさ」

金之助は割り箸を置いて、テレビに入った。

アナウンサーが解説をしている。寒さのせい、興奮のせい、あるいはそれを装ってか、頬は紅潮している。

『全国から集まったプルトップはおおよそ二万一千キロで、数はなんと七千万個。プルトップ五百キロぶんで車椅子一台ぶんですから、四十二台の車椅子が寄付できることとなります。集計の結果によってはさらに増えるかもしれません！ なお、募集はすでに終了して——』

「…都市伝説」

金之助の瞳が前髪の奥で震えた。直矩はにやりと笑って金之助を見た。

「プルトップを大量に集めると、車椅子に交換してもらえるっていう都市伝説だな。このテレビ局は少し前からキヤンペーンを組んで、プルトップを募集して

いた。お前はテレビ見ないから気がつかなかっただろうが」

金之助は手の中の緑茶の缶を見た。

「……どうしてそんな……企画が？」

「俺もそれは気になった。プルトップだけを集めても効率が悪い。アルミが欲しいなら、最初からアルミ缶を集めればいいんだ。わざわざプルトップを集める理由、そんな企画がボツにならずに全国ネットで放送されている理由は、おそらく都市伝説の再現だ」

金之助はテレビに見入った。このテレビ局は都市伝説に操作されているのか、見極めるつもりだった。

『さて、ここで特別ゲストをご紹介します。全国車椅子協会理事長、レオン・ベルチエさんです』

カメラが動き、太った西洋人を捉える。

金之助は缶を取り落とした。

「…オルレアン」

映し出された鼻の丸い男、レオン・ベルチエと名乗るフランス人は、金之助が北

海道の校舎で見た怪人、オルレアンであつた。

「なに、こいつが。そうなのか」

金之助はうなずくなり、テーブルの上をそのままにして、自室へ駆けていった。

「携帯テレビ取ってこい！ 車は出しとく。すぐ行くぞ。SUNテレビだから、場所は六本木だな」

まだ寝巻きの背中に、直矩が投げつけた。テレビの中では、オルレアンが通訳を使つて、車椅子とアルミニウムの関係を説明している。

4

SUNテレビ本社は、あまり屋上を活用していない。草薙素雄は空を通過して、やすやすと貯水タンクの脇に座ることができた。

「いい景色だ」

「全部……」

「俺の物だ」

草薙は満足げに目を細めながら、右手に

握つた長い棒を、忙しく動かしている。動きに合わせて、薄く輝く青い線が、空中に煙のように現れた。

丸い棒は少しのあいだ、くすんだ桃色をしていたが、すぐに色を変え、沸き立つ明滅を伴つて、渦を巻く緑になつた。草薙は意に介さず、棒を細かく動かす。緑はまた別の色に変わつていった。

棒は草薙の握つたあたりを境に、先へ向けてしばらく太くなつている。そして急な坂を描いて細くなる。先端は銀色に光り、そこだけが色を変えなかつた。

「さあ……」

「パーティーだ」

「最初は思いっきり」

「派手にやろう!!」

草薙の眼下でひときわ大きな歓声があつた。このビルの前ではいま、集まつたブルタブの集計が行なわれているのだ。女性アナウンサーの声が、屋上にもかすかに届く。

「出ました！ 二万五千五百とんで三キ

ロ！」

「：十分だぜ」

草薙は腕を下ろした。夕方の空中、草薙から少し離れたところには、なにかの模様が描かれたまま残つた。

夕陽の近くに描かれたほうは、水墨画に似ている。目を見開いて立ち上がった蛙が、口からもやを吐いている絵だつた。毛筆を使つたようなタッチは、草薙の持つていた棒で描けそうなものではない。蛙は威を誇示しようとしてはいるが、どこか呆然としているようでもあつた。蛙の奥には葦の草むらなど、簡単な背景が描かれている。

もう一つのほうはあまり絵画的ではなかつた。画面の下にいる人物たちには、焦りを表す汗の記号が付与されているし、悲鳴を表す吹き出しや擬音などもある。中央には熊か犬のような生物が白目を剥いて倒れており、その背中を破つて、奇怪なものが出現したところだつた。怪物は、ハロウィンで使うカボチャ型提灯に

似た顔立ちで、目と口が白く発光している。頭部は茄子に似て、後ろへ向けて膨れている。首は短く、体はだいたい人間に似た形をしているが、爪が鋭く、タコの足に似た尾を持っていた。

強い風が吹いたが、空中に浮かんだ模様は動かず、もとの位置にとどまった。

草薙は持った棒をゆっくりと振り回し、腕時計を見た。長針は予定より少し進んでいた。

立ち上がって、草薙は何度か屈伸をした。灰色のダウンジャケットが、こすれてわずかな音を立てた。今日のために用意した新品である。

夜空は暗く、地表は明るい。その中間のわずかな部分で淡く光る、蛙と怪物の絵に、草薙は続けざまに棒、すなわち巨大な筆を振るい、点を書き入れた。誇らしげに草薙は笑う。

「いっぼうの出典は：
『道徳戦士超獣ギーガー』
っていうマンガ!!!」

「もういっぼうの出典は
『超獣人物戯画』
っていうマンガ!!!」

絵は完成した。それに付随して現実が動く。青い輝きは強さを増し、草薙は目を細めた。

5

暖かい店内から出たとたん、松沢が肩を震わせた。今日は色つきの伊達眼鏡が、かすかに音を立てる。

「寒いよね」
奈留が気遣うと、松沢はマフラーに顎の先をうずめて答えた。

「服、気合入れすぎちやったかも」
奈留のほうは、機能性のほうを少し優先したため、夕方の大気にいじめられずすんでいた。

「寒いかあ？」
ジャケットの前を空けたままで、内田が肩を寄せる。薄いTシャツには円の模様が描かれてある。

「寒い。むしろお前の格好がまず寒そう
だろ」

上着のポケットに両手を突っこみながら、高橋が内田に言った。ごつごつした高橋の腕時計が、街灯の明かりを反射して、一瞬だけ光った。時刻は四時になろうとしている。

「ライブのあいだはぜんぜん寒くなかったんだけどなあ。スシテンプルのヴォーカルのひと、やっぱりかつこよかつたし」「すごい背高くて。びっくりしちゃった」「マイクスタンド、届いてなかったよな」「あれは受けた」

松沢の招集に応じて集まったのは、奈留、内田、高橋の三人だった。帰省などの予定が入っていなかったメンバーである。

奈留たちはライブのあと、近くの店を見てまわり、やつと一段落ついたところだった。奈留も松沢も、普段よりは豪快に金を使っている。もちろん高校生という身分相当の額だが、奈留は気分が浮かれてくるのを実感していた。

——そういえば、このごろはしてないなあ、むだ買い。

以前はストレス解消の方法だった衝動買いは、このところすっかりなりを潜めていた。むりに作り出していたささやかな非日常は、金之助と出会ったことで精彩を欠いてしまったのかもしれないと、奈留は思った。

「けつこう暗くなってきたな。もう買い物はいいんだろ？ どうする？ カラオケとか行つちやう？ それとも帰る？」 ショッピングのあいだ、手持ち無沙汰にしていた内田が言う。

「そうだな。松沢さんたち、どこかまだまわる場所ありますか？」

高橋は手提げ袋を持ち替えながら言った。松沢が奈留を見たので、奈留は首を振って返事をした。上下動を基調とした設計の複合施設を歩き回ったため、足が疲れてもいた。

「電車混むだろうし、そろそろ帰ろうかなって思った。美紀ちゃんは？」 「う

ちもそんな感じ。あ、高橋、荷物重い？ 持たせてごめんね」 「おれはだいじょうぶです」

高橋は内田よりもさらに背が高いうえ、肩幅も広い。ふだん大声を出して騒ぐほうではないが、男子のあいだでは、筋肉トレーニングを無意味に行なう趣味をかかわれたりもしている。しよっちゆう腕相撲を挑まれているのを、奈留は遠目に観察していた。

なんとなく高橋が先頭になって、四人は駅へ歩き出した。松沢が少しむりをして歩幅を合わせ、高橋のすぐそばについた。

坂を下って、四人はSUNテレビ本社の前のイベント広場に出た。「募プルトップ」という看板があり、大量のプルタブが詰まった箱が、三角錐状に積み上げられていた。アナウンサーがカメラマンに向かって、マイクを片手ににこやかな表情を向けており、集まったプルタブについて解説していた。

「あ、あれ、お姉ちゃんが送った。缶のプルタブ集めるやつ」

松沢がそれを指差して言う。

「へえ。どのくらい送ったんですか？」 高橋が興味を示したとたん、松沢の顔が輝いた。二人が立ち話をはじめたので、奈留と内田は少し離れたところで立ち止まった。

坂に並ぶけやきには、多くの装飾灯が取り付けられているが、まだ点灯はしていない。坂が青と白の光に演出されるのは、案内によれば五時以降のはずだった。「出ました！ 二万五千五百とんで三キロ！」

そのとき、女性アナウンサーの声が、ビルの谷間に響いた。プルタブの集計結果が出たのだった。

「そんなにあるのか。すごえな」 内田が感心してつぶやく。奈留たちの後ろで足を止めた通行人が、撮影スタッフにつられて、拍手をした。そのとき、海苔を破るような乾いた音が、乾いた空

気をつついた。

まず声をあげたのはカメラマンだった。次いでアナウンサーが振り向き、その場に凍りついた。

プルタブの詰まった数十個の亚克力箱に、順々に小さな穴が空いていた。見えない指に押し破られるかのように、スタッフたちの目の前で、亀裂が広がっていった。

「いったん止めて」

スタッフのだれかが、カメラマンに向かって腕でバツの印を見せる。そのあいだに、ステージ上の亚克力箱には、すべて穴が空いてしまった。異変を見て取ったのは、地上にいる人間だけではなかった。屋外階段の上をいた通行人も、広場に視線を落とし、ささやきあっている。

「積みすぎて壊れたんじゃないの？」

別のスタッフが言う。第二の変化は少し間をおいて起こった。空いた穴のそれぞれから、中のプルタブがこぼれ出してき

ただ。

「どうしたんだろうね？」

疑問のざわめきは、松沢だけでなく、さまざまな人間を取り巻いていた。SUNテレビから出てきた客もいれば、近くの日本庭園には中年の夫婦もいる。群衆の注目は、テレビ局の意図とは少しずつながら、ステージの上に集まっていた。こぼれ出すプルタブの量はとどまるところを知らず、銀色の塊が形成されていく。

プルタブは融解し、液状のアルミとなっていた。それが小さな穴を空け、意志を持ったように抜け出し、箱の外で集合しているのだ。箱の外側を、明らかに重力以外の力を持って這い進む銀色は、ツル性植物の成長を早回しで見るのに似ていた。

「とれ、まわせ」

カメラマンが慌てて撮影を再開する。女性アナウンサーは数歩下がって、スタッフの後ろに隠れた。周囲の様子を気に留めることなく、融けた十数トンのアルミ

は、いまや完全に箱を出て、平べったい形に凝結した。それでも、人間の腰ぐらゐの高さはある。

「美紀ちゃん、あれ、どうなってるの」
奈留と内田は、松沢たちに追いついて足を止めた。数メートル先で起きている異様な光景に、奈留は当然、都市伝説の怪奇を想起した。

——プルタブが融ける都市伝説？ そんなの、本にはなかった。

落ち着いていられなくなって、奈留はぐるぐると周囲を見た。いぶかしげな顔、にやつく顔、手品の種を探ろうとする顔。「瞬、青い強烈な光が、上空で炸裂した。「ギギギ……」

歯車のきしむような音とともに、ステージ上の金属塊が震え出した。固唾を飲んで見守るしかない人間たちに囲まれて、凝固体は、その山頂を風船のように膨らませた。

メリ　メリ

木の枝をゆつくりと折っていくのに似

た音が響き、そして、アルミニウムは次第に背を伸ばして、人間の何倍もの大きさの怪物へと、形を変えていった。

撮影機材の強烈な照明を反射した体は、カンガルーのような尻尾を除けば、足の短い人間に似ている。四本ある指を覆う爪はいずれも長く鋭い。奥行き長い頭には、爛々と輝く巨大な目玉が二つあり、人間を見下ろしている。怪物は何本もの尖った牙を生やした口を開き、咆哮した。

「ギーガー」
ガラスのこすれるような誕生の雄叫びは、周りの人間の背筋を震え上がらせ、足をすくみあがらせた。怪物は悠々と頭を左右にうねらせ、足のすぐそばに最初の犠牲者を見つけた。

カメラマンは機材を放り出して逃げようとしたが、それより先に怪物が一步を踏み出した。軽い響きが生じ、カメラマンは、巨大な足の裏に完全に組み敷かれた。冷徹に光る足の甲に、もがく人間の型が浮き出たが、型はやがて拡大をやめ

た。全身を覆われ、呼吸ができなくなったのだった。

「逃げよう！」
まず正気を取り戻したのは奈留だった。内田と松沢の肩をつかみ、高橋には体当たりをするようにして、奈留は叫んだ。

「お、お、おう」
内田が息を吸いながら言った。しかし腰が派手に震えており、いつその場で倒れてもおかしくはなかった。他の二人も似たり寄ったりだった。群衆の中には、悲鳴や怒声をあげながら逃げ出す者もいたが、最初の狂乱が坂を下って遠くへ走ったあとは、巨大な怪物の威容を見上げるだけの集団が残った。

怪物は人間を踏んだ足をどかすと、長い両腕を振り上げ、無造作に振り回した。いくつかの反射のあと、奈留にまで音が届くほど豪快に、血しぶきがあがった。大きな泡がはじける音に近かった。寒さのせいかな、奈留の嗅覚は無反応だった。

切れ味の鋭い金属の爪が、周囲にいた

人間の首や肩を、続けざまに切り飛ばしていた。植木や、広場の中心にある池を、飛び散った血液が汚す。だらりと垂れた怪物の指を伝って、大きな赤い滴が垂れた。怪物は鋭く太い歯がついた口を広げ、薄いもやを一吐きした。数人が声をあげずに走り出すのを、奈留は見た。

「やばいやばいやばい」
高橋は、思い出したように荷物を取り落とすと、一步後ろに下がった。しかしそれが最大の反応だった。

怪物はわずかにはずみをつけると、重さなどまるでないような動きで垂直に跳び上がり、広場の真上に設置された天蓋にぶらさがった。すぐそばには、屋外階段から広場を見下ろしていた人々が集まっている。三階ほどの高さから、半ば他人事のように虐殺を眺めていた人々は、遅すぎる戦慄に見舞われた。あまり時間を与えず、怪物は大階段に跳び移り、足と腕の鋭利な爪、そして太い尾を、容赦なく行使した。奈留たちの位置からは、

惨劇の様子は見えなかった。水をすくうような音のあと、階段のれんが色の外壁を伝って、血液が垂れはじめた。

「みんな、早く、」

奈留は猛烈な怖気と戦いながら、顔を歪めて言った。言葉には涙が含まれていて、哀願の調子にさえ近かった。

怪物は黒い空を見上げ、雄叫びをこだました。禍々しい姿を映す、全面ガラス張りのテレビ局のビルが、乾いた振動を見せた。それが収まらないうちに、怪物は蛙のようにいったん足を曲げ、そして跳躍した。瞬間ののち、怪物の巨体は、奈留たちのほぼ眼前にあった。

「やばいやばいやばいやばい！」

まだその場に残っていたわずかな人間も、今度こそは眼前の光景に本能を直撃され、乱雑な方向へ散った。その勢いに吞まれて、高橋は滑稽な方法で後ろ向きに歩き出した。内田はわななく両手を前に突き出した。奈留は三人の服のすそを、ほとんど泣きながら引いた。松沢は、

怪物が割りこんだ。右の手を素早く振るい、松沢を強く打つたのだった。母親が聞き分けのない子からものを取り上げるときのような、断固とした素早さで、松沢は声を出せないまま、空中にすくいあげられた。その直接の光景ではなく、落ちた紫のマフラーを見て、高橋が動作を止め、かすれた声で叫んだ。

「松沢さん！」

呼ばれた松沢のほうは返事ができる状態ではなかった。怪物に握られた松沢の体は、新しく空気を吸いこむことなど望めないほどに圧迫されていた。自由になる爪先と顎を必死に震わせ、松沢は無言で助けを求めた。人間など簡単に飲みこめそうな、怪物のおぞましい口が、奈留たちの頭上で、笑うように動いた。

「松沢！」

苛立ちをこめてうなり、怪物に殴りかかろうとする高橋のエートを、奈留が懸命につかんだ。両者ともその行動の意味には気づかず、高橋はただ進もうとし、奈

留はただつかもうとしていた。その布の感覚を失ってはいけないという理不尽な命令を、奈留は奈留に下していた。

そのあいだにもアルミは松沢にきつく巻きつき、呼吸のための胸や腹を締めつけた。怪物の右手の甲には、カメラマンを踏みつけにしたときと同様、松沢の体の形が浮かびあがっていた。怪物は巨体のどこにも、慈悲心を潜ませていなかった。

「美紀ちゃん」

奈留は歯を堅く食いしばって、戦慄でかすむ景色を見上げた。怪物の銀色の頭頂部が、出し抜けに、まばゆく光った。奈留にはどこかなじみのある光だった。

「前川麻子は、『劇情コモンセンス』で、こう書いている——」

いくつもの絶叫と怒号が響くなか、唯一の落ち着いた声が降ってくるのを、奈留はきいた。怪物は、輝いたのではなく、反射したのだった。

「『いつでも演技という薄膜を被っ

るような容子に比べて、思いきり良く自分を剥き出す若手たちは、生身の人間らしさにきらきらと輝きます。』」

無限の光彩を放つ陰陽の杖、コーカイトイルを携え、二宮金之助が中空から飛び出した。

松沢を覆うアルミニウムの薄膜、つまり怪物の手が、見えざる魔法の力によって、乱暴に剥かれていった。銀色の怪物が痛みをうなりで示す。落ちてきた松沢の体は、高橋が両腕でしっかりと受け止めた。松沢の眼鏡が落ちて、遠くへ跳ねた。

頬を赤く上気させた金之助は、怪物の背後によろめきながら着地すると、大判の本をかたどった杖頭をかざした。その本の表紙では、色彩が絶えず波打っている。さまざまな色と輝きを持った文字が、杖頭の表面を這い回っているのだ。杖の柄は針金のように細く伸びて、金之助の右手に幾重にもからみつき、直線を描いてさらに下に伸びている。

どういう経緯でここに現れたのかはわからなかったが、奈留はまた、金之助に命の危機を救われたのだった。目の中に溜まっていた涙が、一気にこぼれるのを、奈留は感じた。

「金之助さん」

「……逃げて」

怪物は尻尾を振り回して、金之助に向き直った。円形の白い眼球と、数メートルの距離で睨みあつたまま、金之助は背中のリュックの口を、左手で少し開けた。中には大量に本が入っており、それが金之助の唯一の武器となることを、奈留は知っていた。

怪物は胸板を前に突き出して両腕と手を広げ、金属の表皮を持つ巨体をうごめかした。軽自動車ほどもある顔が、金之助の杖に下から照らされ、恐ろしげな陰影を持った。

結んだ口を金之助が開くと同時に、怪物は大きく一步を踏み出した。後ろに取り残された滑らかな右腕が、金之助めが

けて振り回される。カメラのフラッシュにも似た一閃で、金之助の体は軽々とはじきとばされた。奈留は思わず顔を手で覆った。

天蓋を支える、ガラスで覆われた鉄骨に、転がりながらぶつかった金之助は、打ちつけてしまった背中を押さえ、立ち上がった。黒いコートには裂けた部分はない。金之助に伝わったのは、怪物の腕の勢いだけだった。コーカイトイル、存在だけを記述された杖が、鋭い爪の接触を防いでいた。

「月ノ夜、あいつ、だれ？」

内田が震えながら、奈留をつつく。

「え、えっと、すごい知り合い」

「すごいのか」

短いやりとりで、わずかに余裕を取り戻した内田に、高橋が怒鳴る。

「松沢の荷物、拾つとけ！」

怪物の長い尻尾に気を配りながら、高橋は松沢を背負って、道路のほうへ走った。道路にはたくさんの車が止まって、映画

じみた光景を見物している。内田も、路面に落ちた紙袋を乱暴にかきあつめて、あとへ続いた。

「月ノ夜さん！ 早く！」

気を失った松沢の頭を、肩のあたりに位置させながら、高橋が振り向いて促す。

「でも」

奈留は、池の向こう側の金之助を見た。

金之助は怪物の動きを見ながら、奈留に手振りを示した。

「…逃げて」

そう告げる右の唇の端には、わずかに血がにじんでいる。杖の不規則な光が、金之助の隠れた怯えを少し露わにした。恐怖を、塩気のある唾液とともに飲みこんで、金之助は二冊目の本の題を唱えた。

「ジェシー・ダグラス・ケル―シユは、『不死の怪物』で、こう書いている―

」

その響きはまさに魔法の言葉だった。奈留は魔法を信じて、高橋たちを追いかけた。

怪物は、金属的な鳴き声をまたあげて、銀色の足を踏み出した。内田が拾い損ねた松沢の伊達眼鏡が、右のかかとの下に消える。

金之助の背負った青いリュックが、中に生き物でもいるかのように、もぞもぞと動く。魔法が読み上げられるのにあわせて、『不死の怪物』が再生され、金之助が右手に持った杖と融合しようとしているのである。金之助は、読み上げるべき文章を、注意深く吟味して、唇に乗せようとした。

夕空に、雷のごとく、青い光が満ちた。冷たい空気が割れる音を、そして平べつたい声を、金之助は頭の上に聞いた。

「こいつの**出典**は

『**デカスロン**』

っていう**マンガ**!!!」

ズボツ

とつさに横へ倒れた金之助のコートの裾

をかすめて、ビルの屋上から飛んできた槍が床に刺さった。床から木片が弾け、水面に浮かんだ。

金之助は慌てて、怪物から離れるように走ったが、怪物のほうは特に動かなかった。金之助は、着地の衝撃でまた小刻みに震えている槍の角度を見て、その送り主を探した。

相手はSUNテレビの屋上にいた。顔がわかるほど近くではなかったが、鈍く明滅する柔らかな光が、屋上から主張していた。その明滅が、自分が持った杖の色の変化と同調していることに、金之助はすぐ気づいた。

「俺は……………」

草薙**素雄**!!!」

「キサマと同じ…いや!

キサマ**以上**の

魔法**使**いだ!!!」

唐突に現れた屋上の男は、大声で名乗った。金之助は小さく

「…ぼくは……魔法使いじゃない」

とつぶやいた。八階建てのビルの上まで
届く声ではなかったが、言わずにはいら
れなかった。金之助は右手に握った杖に
目を落とし、手のひらを開いた。杖は落
ちない。手に幾重にもからみついた、緑
色の細い柄は、柳のようでもあった。

「キサマの”本の魔法”……
陰陽の杖”コーガイテイル”と
俺の”マンガの魔法”
正朔の杖”ガンマウイツツ”と……
「どっちが強い
殺し合おうぜ!!!」

草薙の持った巨大な筆、ガンマウイツツ
が、挑発的な言葉に反応して、乱暴な明
滅を繰り返す。赤い、あるいは淡い、あ
るいは硬い脈動が走るたびに、金之助の
杖の杖頭も、断続的に色を変えた。

草薙は猛烈に筆をふるい、空中に複雑
な模様を描き出していく。巨大な筆の軌
跡には、薄ぼんやりとした青の線が残る。
何種類かの風が吹いたが、線はなにかで
固定されているかのように、もとの位置

を動かなかった。

「キサマは
本を読むことで
魔法を使うが」
「俺の魔法はこうして
マンガの”コマを
描き出すことで
発動する」

怪物がゆつくりと動き出し、金之助に爪
を振り下ろした。金之助はかるうじて避
けたが、怪物が手加減をしていることは
わかっていた。金之助は一つ息を吸って、
奥の日本庭園の方向へ走った。

「二宮金之助……
この意味がわかるか？」
「文章を読むだけなら
誰でもできる……が
全てのマンガの絵を
完璧に再現することは
常人には不可能だ!」

演説調の草薙の言葉にかまわず、金之助
は走りながら呪文を暗誦する。

「ツヴァイクは、『駄目な男』で、こう
書いている——」

分厚い本をかたどった、ざらざらとした
杖頭の表面を、薄暗い青が這った。蛇と
いうよりはなめくじに似た、直線的な動
きだった。

「『ひとつの人生が無理矢理別の軌道に
振じ曲げられてしまったことを考えたこ
とはないはずだ。』」

金之助の背中のリュックサックがもぞも
ぞと動き、そしてその口を内側からこじ
開けるようにして、クリーム色の本が飛
び出した。本は金之助の頭の上に躍り出
て、そのまま輝く杖頭へと突っこみ、色
彩が動き回る大判の表紙へ溶けこんだ。
本がより巨大な本に飲みこまれたのであ
る。

怪物は今度は俊敏に動き、金之助の脇
腹めがけて、金属の爪を横なぎに払った。
起こった風で金之助は思わず顔をしかめ
たが、右手はそれとは関係なく動き、杖
のか細い柄が、巨大な爪の勢いをすべて

殺していた。一撃めとは違って、金之助の矮躯はそこに残っており、伝わるべき力は別の方向へねじ曲げられてしまっていた。

「ほう：やるな」

白い息の塊を吐き出しながら、草薙が笑う。空中の絵はほとんど完成に近づいていた。草薙が病的と呼べるほどの勢いで筆を動かすと、線が無数に集合し、絵の背景に細かい周期的な格子模様が浮かびあがる。

「だがしよせんキサマは誰でもできることしかただ本を読み上げる
ことしかできない」

怪物は金之助に、両腕の爪を交互に振り下ろすが、その一撃ずつが杖によってはねかえされた。澄んだ音が打ち鳴らされる。金之助は怪物をほとんど意識に入れていなかった。ただ杖が魔法の結果として動き、的確な位置に一本の細い盾をな

していた。
「その点：俺は違う
絵の完全な模倣には
完璧な技術を要する」
「キサマと俺では
魔法以前の才能が
違いすぎるんだよ!!」

金之助は音が立つほど歯を食いしばった。声こそ出さないまでも、その表情は妬みや苛立ちで絶叫していた。

「話す言葉も
使う魔法も
キサマの物は
全部借り物だ!!」

金之助の発話はすべて、書籍からの引用で成り立っている。生来の吃音と、過去の痛ましい記憶が、金之助本来の言葉を圧殺しているのだった。その事実を知っているのは、少数の知人を除けば、あとはヘデモナ——金之助に魔法を与えた、超越的な悪夢だけだった。あの草薙という男、声の質からして少年に違いないあ

の男は、ヘデモナから魔法と金之助に関する知識を受け取ったのだらうと、金之助は考えた。怒りの矛先は、金属の怪物を通して草薙を貫き、その背後にいるヘデモナへと向いていた。

「キサマ自身には特別な才能は無い
キサマは俺に絶対になれない：
よし もうすぐ完成だ
俺の芸術を見せてやる」

草薙は勢いよく、空中に筆先を叩きつけた。電子的な青い光が広がり始める。

「……お前も」

怪物の猛撃を次々にいなしながら、金之助は口を開いた。

「お前の力だつて借りものじゃないか！この人殺しの怪物は、お前のものでもないし、ましてや芸術なんかじゃない！」そのわめきは、野性を覆っていた他人の言葉の引用ではなかった。不明瞭で切れ目がなく、前後が逆転した、同じ音を何度となく繰り返してしまう滑稽な発音、それが金之助の本来の言葉だった。壊れ

た言葉を理解できるのは、金之助自身と、それから金之助の意図を読み取ることが出来るもの、すなわちこの私——ヘデモナ以外にはいない。

金之助の意味を持たない言葉は、屋上の草薙にも届いた。草薙は笑った。杖の筆先を動かすのも忘れ、涙を流さんばかりに大笑いをした。いやらしい振動は広く響いた。

「ああ!?

聞きえねーな!!
キンノスケ
金之助よお」

「もっとブツにしゃべってくれよ
俺にもわかるように」

金之助は顔を赤黒く染めながら屈辱に耐えた。道路に止まっている車の中で、金之助が助けようとしている人々さえもが、草薙に同調して笑っているというような幻想さえ、金之助は抱いた。唇の端からは、いったん止まった血が、再び流れ出した。あのように気ままに言葉を操れる人間に比べて、自分はなんと不自由なの

か、金之助は眼球が熱くなるのを感じながら、神ではないなにかに向かって、心のうちで吐き捨てるように嘆いた。そして沸騰した頭で、次に読み上げるべき本を考えた。

そのように興奮していたため、金之助は、背後から飛んでくる新しい凶器に気づかなかつた。杖は絶え間なく襲い来る怪物の爪をあしらっていた。わずかに錆びた二つの鎌は、回転しながら金之助のリュックを裂き、狙い通りに本をばらまき、もと来たほうへ飛び戻った。

金之助は慌てて身をかがめ、己を守る武器を拾い集めようとしたが、物陰からまた鋭い鎌が閃いて、本を続々と使い物にならなくしていく。金之助は出した手を急いで引っこめた。

「遅すぎだぞ!

100メートル3秒^{びょう}ってのは

でたらめかよ?」

人気のなくなつたクレープの屋台の陰から、背の高い女が歩み出て、草薙の悪態

に答えた。

「オルレアンがあれほど慎重にしたがるから、どんなもんかと思つて見てただけ。それに、人間といつしよになにかするなんて、気持ち悪いわ」

飛び回っていた鎌は、磁力で吸い寄せられるかのように、女の両手に納まった。赤いハイヒール、赤いベルボトム、赤いレインコート、金之助は顔を恐る恐る上げ、女の顔を見た。顔の下半分は、赤いルージュを差した口が占めていた。張り出したえらの上まで唇があり、奥歯が唇のあいだから見え隠れしている。

「……口裂け女」

狐のように細い視線が、金之助を捕らえていた。

路地にたたずんでいる、大きなマスクをした女が、「私つて美人?」と声をかけてくる。「はい」と答えれば、マスクの下の裂けた口を見せられて殺される。

「いいえ」と答えて女を怒らせても、結果は同じ——昭和のころ、日本じゅうを

ちよつとした狂気に巻きこんだ都市伝説が、現実という形をとって、金之助の前に立っていた。

「そうかよ

『でも…でも、

なんでわたしたちが

人間の力を借りなく

ちゃいけないの!』

つか ^{しゅってん} 出典は

『うしおととら』」

「ギ—ガー!!

^{どろろ} 道路へ出るぞ!!」

怪物は金之助に襲いかかるのをやめ、大きく横に跳躍した。着地点は坂になった道路の上、車と車のあいだだった。泡を食って急発進をはじめる軽自動車の後部ガラスに、怪物は鋭い爪を突き入れ、運転手の首をはねた。緑色の軽自動車は、前の車に激突した。

怪物を追って数歩進んだ金之助の眼前に、粘り気のある赤が溢れた。口裂け女が恐るべき脚力を用いて、一気に距離を

詰め、立ち塞がったのだった。口裂け女は金之助を見下ろすと、鎌を持ったままの両手で、細い肩につかみかかった。薬指と小指と親指だけで握られているにも関わらず、金之助はつぶされるような痛みを感じた。コートの上からでなければ、赤く長い爪が、金之助の青白い肌に突き刺さっていただろう。

そのまま、口裂け女は突進した。ハイヒールが床を突き、銃声のように鋭く連続した音をたてる。靴のかかどに何度も痛みを感じた金之助は、最後に背中が壁を叩くのを感じた。頭の上には、S U N テレビの広告を映す、巨大な屋外モニターがあった。激突に合わせて、画面の下端が少し揺らぐ。

嗜虐的な笑みを、まさに顔じゅうに浮かべながら、口裂け女は金之助の顔のをぞきこんだ。息がかかるほどの距離に、醜く裂けた頬の断面を見せつけられ、金之助は震えた。

「怯えているのね？ いまのおまえには

何の力もない。源がないとなにもできない……」

口裂け女の長い髪が、空気の流れでかすかに動く。その隙間から、切り刻まれた本のページが宙を舞うのを、金之助は見た。

じりじりと、金之助は杖を持った右腕を動かそうとしたが、肩をつかんでいる口裂け女は、筋肉の動きをすぐと感じ取った。口裂け女は金之助の右腕を持ち上げると、細い手首を固定するようにして、鎌を壁面に突き刺した。そして金之助の肩から手を離し、ゆっくりと後ろに下がった。金之助はすぐに逃げ出そうとしたが、右腕を少し動かすと、鋭い鎌の刃に当たってしまい、静脈から血が流れ出るのだった。木製の握りを押して、鎌自体を抜き取ろうともしたが、金之助がいくら力をこめても、わずかな隙間さえできなかった。

「金之助。いま私がこれをおまえに投げつけたら、どうなるか……」

口裂け女は、左手に残ったもう一方の鎌を持ち上げ、なめまわすように眺めた。金之助の杖の色彩の流れが、磨き上げられたような刃に映った。

金之助は焦って体を動かしたが、右腕にさらに深い傷ができただけだった。

「おまえが使った魔法のせいで、おまえに来る攻撃はどれも防がれてしまう……その杖が動き回って、鎌を弾くだろうね」

金之助にはもちろんその先がわかっていた。『駄目な男』の魔法によって、杖は金之助の意志や体勢に関わりなく、的確に動いて脅威をさえぎる。だが、右腕にからみついた杖が動くということは、鎌の刃に押さえつけられた右腕もまた、大きく動くということである。

遠くから、爆発の地響きや悲鳴が聞こえる。アルミニウムの怪物が、道路を蹂躞しているのだらうと思うと、金之助の心にまた一つ、怯えが増えた。死の緊張がいろいろな感覚を鋭敏にしていく。鼻

先には、血液のとげの多い香りが、四方から漂ってきた。どうしようもない嘔吐感がこみあげる。

「ほら、投げるよ」

口裂け女は左手を器用に動かして、鎌を何度か回転させた。いつぼうは、ジェットコースターほどの速さで走り、さらに同じぐらいの速度で飛ぶ凶器を二つも持ち、全身で金之助を追いつめてくる怪人、口裂け女。いつぼうは、たいした筋肉の力もなく、腕を固定されて逃げ場もなく、唯一の対抗手段も破壊された、怯える少年。生殺与奪を握れるのはどちらか、特に考えるまでもなかった。

金之助は右手を閉じ、杖をそつと、小さく振った。杖頭が奇怪な形に歪み、クリーム色の表紙の本が分裂した。本は金之助の左耳をかすめ、モザイク模様の路面に、ぼとりと落ちた。杖の反応をさせないために、金之助は自分から、最後の防御を捨てたのだった。『駄目な男』の魔法は解けた。

口裂け女は大きな口を開けて、上を向いて笑った。白い犬歯が露わになった。

「そんなに手を失うのが怖いの？ ほんどうに臆病なのね」

杖の柄がからみついた右手を刈り取られてしまったとしても、杖が金之助から離れることはないはずだった。金之助は、手を切断するという激痛を恐れ、この場を逃げる機会を捨てて、魔法を解いたのだった。

金之助は苦い涙をこぼしながら、口裂け女を卑屈ににらんだ。太いパンツ越しにも、膝の震えは明らかだった。

「考えてきた死なせかたが、あつてね」

少し首を傾げたあと、口裂け女は短く手首を動かした。鎌が回転して飛び出し、金之助の左の頬をかすめて、また口裂け女の手に戻った。

「こうやって」

鎌はまた、青白い頬を裂いた。正確なコントロールだった。

「どんどん傷を深くしていく」

振り子のように、鎌は行っては戻った。
金之助は悪寒を押さえつけようと必死に
なった。鎌の軌道が少しでもずれれば、
刃は首すじを裂き、金之助の命は終わる。
「おまえの頬が、私みたいに裂けて……
口の中の舌も、少しずつ、少しずつ、切
り進めていく」
数度めの鎌の往復で、いままでは赤い線
だった傷口から、温かい血が流れはじめ
た。
「狂って死ぬ、金之助。理性を失って死
ね」
口裂け女は、女性にしては太い声で、ま
た金之助の名前を呼んだ。都市伝説の恐
怖たちに、名前を知られ、顔を知られた
時点で、自分にはもうチャンスがなく
なったのだろうと、金之助は思った。そ
れでも、逃げたい、安全な自宅の書庫で、
まどろみながら過ごしたい、そういう幻
影が、あきらめを拒否させていた。
「うああ」
金之助は叫びながら体を乱雑に動かした。

手首と頬に厳しい痛みが走るが、右手を
押さえる枷は外れない。さらに、顔をか
ばった左手を鎌に襲われ、金之助は絶叫
した。ぼろぼろと嗚咽をこぼしながら、
金之助は暴れるのをやめた。
「動かないでよ。切りすぎたじゃない」
恐る恐る舌を動かして、金之助は自分の
頬の内側を確かめた。小さいが、穴が空
いている感触があった。
「やめて。助けて」
懇願は、殺人そのものを目的とする怪人
には無意味だった。もとより、戦慄に痺
れた頭では、まともな発音を組み立てる
ことは不可能だった。自分の言葉など、
理解されえない混濁にしかないこと
をわかっていながら、金之助は命請いを
続けた。そのもつれた舌にも、徐々に刃
先が迫る。冷たくなる唇が震える。
「ポマード、ポマード、ポマード！」
だから、遠くからのその叫びがなければ、
金之助は確かに正気を失っていただろう。
口裂け女は手元に戻ってきた鎌を取り

落とし、両手で巨大な口を押さえた。体
を折り曲げ、整った眉にきついしわを寄
せていたが、やがて耐え切れなくなり、
盛大に反吐を撒き散らした。口裂け女に
とって、ポマードという言葉には、呪術
的な意味があった。
「口裂け女は、ポマードつけてた医者
に整形手術受けて、失敗してあんな口
になったの。だからポマードはだいきらい
なんだって」
口裂け女を苦しめているのは、肩で息を
している少女だった。
「……月ノ夜……さん？」
奈留の姿を認め、金之助がつぶやく。口
裂け女は、壮絶な恨みに満ちた視線で奈
留を射抜くと、鎌を拾って逃走した。強
烈な数度の跳躍ののち、口裂け女の姿は
見えなくなった。超人の脚力が発揮され
たのだった。
7
屋外モニターの下の壁に右手を磔にさ

れた金之助のもとへ、奈留は急いで駆け寄った。金之助は落ち窪んだ目で、奈留を見返した。顎はまだかちかちと鳴っていた。

「だいじょうぶですか！」

出血する金之助の姿を見て、奈留は恐る恐る手を伸ばした。冷たい金之助の頬は、血液や涙でぬるぬるとしていた。奈留はなるべく柔らかく、液体をぬぐった。

「月ノ夜、そいつ、やばいんじゃないの」

後ろから追いついてきた内田に、奈留は金之助の右手首を押さえる鎌を指差した。

「あれ、抜いてあげてくれないかな」

「うわ。わかった、やつてやる」

内田ははじめ両手で鎌に取り組んだが、すぐに尋常でない抜きがたさを見て取り、壁を足で蹴って勢いをつける方法を加えた。

「金之助さん、だいじょうぶですか？」

金之助は震えながらうなずいた。顔つきにはまだ生気がない。

「うおっ」

鎌が抜け、内田はあやうく尻もちをつきそうになった。金之助は自由になった右手をぐつたりと下ろし、壁に背中を預けたまま、路面に足を投げ出して座った。

「ハンカチとか出してください。止血しないと」

松沢を背負った高橋が、重そうな足取りで近寄ってきて、ポケットティッシュを奈留に渡した。

「あ、あれだろ、Tシャツちぎって使ったりすんだよな」

鎌を遠くへ蹴りやった内田がポケットを探った。

「——あんたたち、保健体育の授業、聞いてなかったでしょ」

高橋の背中で、松沢がかすれ声で言った。逃けているあいだに、意識を取り戻したのだった。

「そうそう。縛るのは最後にやるんだよ」

ハンカチを当てて傷口を押さえると、血

はすぐに止まった。金之助は頬に残った血を拭き取りながら、奈留にきいた。

「……どうして……戻ってきた？」

「だって、あの怪獣が、道路まで出てきて暴れてるんですよ。金之助さん、やられちゃったんじゃないかと思つて、心配で」

奈留が答えると、金之助は目を閉じたまま、薄く笑った。

「…ありがとう」

大きく息をついて、金之助は立ち上がった。しかし、すぐに壁にもたれてしまった。

「貧血じゃないか？」

刻々と模様を変えていく杖にいぶかしげな視線を送りながら、高橋が言った。金之助はうつむいて、コートの裾をまくり、腕時計を見た。バンドには鎌でつけられた傷があつたが、時計は動いていた。五時までは三十分ほどしか残っていなかった。

「……時間がない。…本を……探さない

と」

「本？」

内田がおうむ返しに言う。金之助はふらふらと歩いて、切りさいなまれた本の残骸を拾い集めた。

「えつと、とにかく本が要るから、だれか、持ってない？」

金之助が本を必要とする事情をよく知っている奈留は、三人の顔を見回した。

「それは？　そこに落ちてるやつ」

内田がかがんで、硬い表紙の本を拾った。

「『ツ　ア　ク短　集』……なんだよこれ」

表紙にはところどころ、日に焼けたように真っ白になっている部分があった。

「…それ……使用済み」

金之助がしやがみこんだまま、振り向いて答えた。内田はページをばらばらとめくって、それから奈留に見せた。文章も表紙と同じで、たくさんの欠けができていた。奈留は以前、北海道の学校で、金之助が言っていたことを思い出した。一

度魔法のために使った本は、中の文字がほとんど消えてしまうのだった。

「確か、有料の図書館みたいなものがあるんでしたよね。アカデミーヒルズとかつてやつ」

高橋が言つて、五十階以上もの高さのタワーを見上げた。窓にはそこそこに明かりが灯っている。いくつかの明かりが急に消えるので、中の人々の動揺がうかがえた。

「それ、今日もやってるの？　お正月休みとかじゃないのかな」

「——高橋、下ろして？　うちのトートに、案内マップ入ってると思うから」

内田の持った白いバッグを指差して、松沢が言つた。高橋は少し膝を曲げて、下りやすいようにしてやつた。

「もういいのか？　さつきまで、肋骨が痛いとか、さんざん言つてたじゃん」

「まだ痛いけど、だいじょうぶだよ。たぶん」

内田からバッグを受け取った松沢は、顔

をしかめてわきばらを押しさえた。

「あとで病院行ったほうがいいよ。骨折とかしてたら大変だし」

心配になった奈留は、いつになく真剣な表情をしている松沢の顔をのぞきこんで言つた。薄い唇は噛みしめられていた。

「このままじゃ、家帰れるかどうかもわからないし。とにかく、あのひとに本が要るんでしょ？」

松沢は折りたたんだ冊子を取り出して広げた。

「年中無休つて書いてある。四十九階だつて。でも会員制みたい。入れないかも」

「そんなもんはなんとかなるだろ。金庫じゃねえんだから」

内田が、四十九階の位置を指で教えながら言う。

「だな。それより、月ノ夜さん、知ってるんだつたら説明してほしいんですけど。あいつ、なんなんですか」

高橋に指差されて、金之助が立ち上がった

た。

「えっと」

奈留が言葉を選んでいると、金之助が口を開いた。

「…あなた……名字…タカハシさん？」

高橋は名前を呼ばれて、少し遅れてうなずいた。

「……時間がない。……本……取りに行く…あいだに、……怪物が……たくさん…襲う」

新しい悲鳴が、遠くから聞こえた。大型犬の鳴き声も届く。別の方角からは、何種類からのサイレンも響いてきた。

「なあ、こいつのしゃべりかた、なんとかなんないのか？」

内田がささやく。奈留が細い顔を強くにらむと、内田は眉をあげて口を尖らせた。金之助は一度目を伏せたが、すぐに頭を上げて、上背のある高橋の顔を見ながら続けた。

「…そ…のあいだ、…足止め……をしなくてはならない。…タカハシさん、…そ

れを……あなたに頼み…たい」

「おい、むちやくちや言うなよ。あんな化け物に、おれにどうしろって」

金之助は一步下がった。左手には大きめのハードカバーを持っている。とはいえ、金之助の持った杖の、本を模した杖頭にかなうサイズの本は、百科事典の厚みをした画集ぐらいだろうと、奈留は思った。

「金之助さん、その本は」

「…これ……だけ残っていた。…タカハシさん、……説明する…時間がない。…体験して」

金之助は右手で魔法の杖を構え、杖頭を高橋に向けた。

「高橋源一郎は、『ゴーストバスターズ』で、こう書いている――」

本の形をした杖頭の表紙に、次々と小さな絵が流れ出す。

「おい、これ、なんなんだよ」

「高橋くん、金之助さんはたぶん、高橋くんに魔法をかけようとしてるの」

「なに」

杖は徐々に強い色彩を放ち、あたりで墨のような光が膨張した。

「『タカハシさんは「正義の味方」超人マンであるので機関車よりも力が強く、弾丸よりも速い。もちろん、高いビルディングも一つ飛び、よつスーパーマン！ てなもんである。』」

奇怪な発光は収束して、高橋を包んだ。そしてそれが終わると、高橋の頭には、だれかのサインが入った野球帽が載っていた。

「……いいですか」

金之助は杖を下ろした。左手にあった本、『ゴーストバスターズ』は、いつのまにか杖に飲みこまれ、なくなっていた。

「高橋、お前……どうなったんだ？」

内田が高橋のまわりをぐるりと回った。奈留の目にも、野球帽以外は、特に変わった点はないようだった。

「おれが知りたいな。金之助、だつて。お前、おれに何を――」

金之助に詰め寄る高橋の表情が、そこで

止まった。

「なんだこれ」

高橋は両手を握ったり開いたりを繰り返した。

「高橋、どうしたの？」

不安げに松沢が言うが、高橋は虚空をじつと見つめたまま動かなかつた。心のうちで、なにかをつかもうとしているのだった。

「あ」

今度は、高橋は夜空を見上げた。表情は相変わらずまごついてはいたが、瞳の奥には新しい確信があるように、奈留には見えた。

「おれ、飛べる」

「はあ？」

内田の狼狽にも答えず、高橋は数歩下がって、その場で逆立ちをはじめた。奇矯な行動に、奈留たちは固唾を飲んで、高橋を見守った。天に向かってすらりと伸びた、均整のとれた足が、ふわりふわりと揺れ出した。高橋は苦しげにバラン

スを維持した。こめかみに血管が浮き上がる。そして唐突に、高橋の手が、路面のタイルから離れた。

「わっー!!」

高橋は橙の空に、落ちるように飛び上がっていった。逆立ちをした姿勢のままだったので、重力が逆転したようにも見えた。

「高橋！」

雲のない空へ、高橋はどこまでも逆さに落ちていくようだった。しかし、ビルをはるかに越えたあたりで、高橋はやつと慌てふためき、腕を振り回した。すると上昇の速度が落ちた。奈留たちが啞然として、影のようになった姿を見守っているうちに、高橋はこつをつかんで、地上へと舞い戻ってきた。

「すげえ！　なんだこれ！」

顔を輝かせながら、高橋はらせん状に、奈留たちの周りを飛び回った。

「∴「正義の味方」超人マン」

金之助がぼそりと言った。

「そっか、さっきの魔法で、高橋はそのタカハシさんになったんですね」

奈留が勢いこんで言うと、金之助はうなずいた。

「じゃあ、いま高橋は、機関車より力が強くて？」

「で、弾丸よりも速くて、ビルもひとつ飛び、なのか」

松沢も内田も、明らかな魔法の力を見て、その凄まじさに圧倒されていた。

「すげえ……怪獣もなんとかできるかも」

動き回るのをやめた高橋は、空中にぶかりと浮かんでつぶやいた。

「高橋、マフラー貸すよ。顔、隠しといたほうがいいと思うから。だれかに見られるかも」

松沢は肩にかけていた紫のマフラーを外して、背伸びをして高橋に渡した。

「気をつけてね？　時間稼ぎすればいいんだから、怪獣の周りをそうやっつぐるぐるしてればいいんだからね」

顔を紅潮させた松沢が、高橋のスニーカーを見上げながら言った。

「わかってます。ありがとう。あ」

高橋は空中を泳ぐように移動して、少し離れたところから、眼鏡を拾って戻ってきた。

「これ、松沢さんのですよ？ 飛んだとき見えたんです」

それは確かに、松沢が怪物にすくいあげられたとき落とした伊達眼鏡だった。高橋は開いていたつるを畳んで、体をふだん立つように縦にしてから、松沢に渡した。

「ありがと！ でもこれ、よく見つけたね、飛びながら」

松沢は受け取った眼鏡をトートバッグにしまった。

「なんかよくわかんないけど、目がすごくよく見えるようになりました」

「それも……魔法なのか」

内田がまぶたをばちばちさせながらつぶやくと、金之助はうなずいた。

高橋はマフラーを顔の下半分に巻きつけながら、落ち着かない様子で足の曲げ伸ばしをした。

「高橋、魔法は五時で終わりだから。五時にはぜつたい、地面に降りてて」

奈留は急いで付け足した。それに手を振って答えてから、高橋は冷気をいつぱいに吸いこんで、ビルの向こう、阿鼻叫喚の地へと飛び立っていった。

「あー、俺も名字がタカハシだったらなあ！」

内田が舌打ちをした。

「金之助さん、じゃあ、早くアカデミーヒルズに行きましょう」

金之助はうなずくと、屋外階段へ走った。

「美紀ちゃん、こっちでいいの？」

「うん。とりあえずエレベーター乗らなと」

しかし、階段をしばらく上がったところで、奈留たちは足をすくませてしまった。踊り場には、さつき怪物に虐殺された、大量の死体が折り重なっていたのだ。

ばかりと開いた口に夕闇を流しこまれた首、手すりに引っかかって揺れている腕、何より奈留たちを震え上がらせたのは、上着を完全に血流で染めながら、奈留たちに生きた視線を向ける男だった。松沢は内田の影に隠れた。

「おい、生きてんのか！」

しかし、内田が近寄る前に、男はこもった息を吐いて、まぶたを閉じた。

「あ——」

奈留は男の死を悟った。

「……行こう」

多くの部分を赤黒く塗られた、冷酷な石の床に、金之助は足を踏み入れた。

「うち、むり」

松沢は一段後ろに降りた。

「こんなとこ、通れない」

声には半分涙が混じった。

「美紀ちゃん——じゃあ、内田、いっしょにどこかへ逃げてて？」

内田は首だけで振り向いて、自分のジャケットをつかんでいる松沢を見た。

「わかった。だけど、月ノ夜はどうするんだ？ そいつと行くのか？」

金之助はどんどん先へ進んでいく。奈留はその後ろ姿を見た。金之助の手首からは、また血が垂れはじめていた。

「うん。美紀ちゃん、ほんとは病院行ったほうがいいと思うけど、いまはなるべく遠くへ逃げて？」

松沢は下を向いたままうなずいた。死体を見ないようにしているのだった。

松沢たちがそろそろと階段を降りていくのを見届けてから、奈留は惨状に向き直った。見たくはないが、足元に散乱した紙袋や人間の体に足を取られないためには、下を見て歩くしかなかった。奈留は薄目だけを開けて、金之助のあとに続いた。まだ乾いていない血が靴の裏に付いて、気持ちの悪い音を立てた。

悲劇の現場をもうすぐ抜けようというところで、金之助が立ち止まった。

「どうしたんですか？」

奈留は金之助を追い越して、足元に死体

のない位置まで進んだ。路面には奈留の足跡が赤く残った。

金之助は黙ってかがむと、落ちていた茶色い通勤鞆を持ち上げた。むりやり作られていた裂け目から、淡い肌色の表紙の本が出てきた。表紙に簡単な線画がついたその本の題は、『蛇にピアス』とあった。

「……月ノ夜……さん」

金之助は、その鞆の持ち主であろう、スーツを着た男の死体を見ながら、そしてその隣の死体を身ながら、言った。

「……彼にも、…あそこの…彼にも、…その女性も、……あの子も、……自分の人生…がある。…彼らが……記憶して…きた、……彼ら独自の……風景…は、……永遠に失われた」

いま見ている、金之助の背中を、冷たくくすんだ風を、人気のない建物を、体験しているのは自分だけだということに、奈留は気づいた。

「…本の……役目は、……孤独な……体

験を……伝えて、……この世界…に……あつたことが……消えてしま…わ…ないように、ずっと…残……しつづける……ことだ」

べつたりと血の付いた『蛇にピアス』を拾い上げ、金之助は立ち上がって奈留を見た。頬から、また新しく血が流れていた。

SUNテレビの社屋は、この場を逃げ出そうとする人々と、怪獣出現という大スクープをものにしようとする人々とで、混乱の渦の中にあつた。カメラマンとレポーター、そして数人の警備員が組になつて、通用口から道路に出ていく。暴虐の限りを尽くす、銀色の怪物の姿は、全国へと中継されていた。

興奮した熱気のあいだを、二宮直矩は悠々と歩いた。社屋の主要な部分に入るには通行許可証が必要である。直矩もそれを入手しており、首からさげてはいた

が、受付にだれもいなかったため、提示はしていない。自分で勝手に入ってきたのである。

直矩は案内図を見ながら、番組出演者の控え室を探した。あちらこちらでドアが開き、テレビでおなじみの芸能人が顔を出す。騒然とした雰囲気は、このフロアももちろん巻きこんでいた。マネージャーと思しき男と口論をはじめているタレントもいる。この危険な場所から逃げ出すか、警察が来て道路が安全になるまで待つか、二人の意見は分かれているのだった。

さんざん迷ったあげく、ついに直矩は目的の控え室を見つけた。ドアには、

「全国車椅子協会理事長、レオン・ベルチェ様」と書かれた紙が貼ってある。中にある人物は明らかだった。

「やつと会えたな、オルシャン」
白いドアを開け、直矩は部屋に足を踏み入れた。

「知っている。きみは二宮直矩さんだ

ね」

太ったフランス人が、パイプ椅子に座って、机の上の菓子をかじっていた。尊大な態度に比して、敬称をつけて直矩を呼ぶ調子だけが、不釣り合いに響いた。部屋には他にだれもいない。

「そうだ。都市伝説を具現化する、お前の信条に興味があつて、ここへ来た」
直矩は立ったまま机に身を乗り出して、相手と顔をつき合わせた。頭のはげあがった男は、座ったまま、灰色の瞳でじつと直矩を見据えた。直矩の尖った顎に、にやつきが浮かんだ。

「都市伝説に、それ自体は無害なお話として流布しているものに、残酷な形を与えているのは、お前だな」

男はハンカチを取り出し、丸い指についた菓子の粉をぬぐった。

「そのとおり。私が、この世の実際のものとして現したのだ。ミミズバーガーの都市伝説も、花子さんも、またジェットババアも……」

蛍光灯の白い光で、男の肌はつやを見せられている。

「そうか。ではなぜ、そんなことをした？ 目的はなんだ。何のために、都市伝説を使って恐怖をばらまいてるんだ」
男は小さな目を閉じた。

「のこすため。都市伝説が、このままで、ただの話としてではなく、人々のあいだに確かに生き続けるために、私はそれをしたのだ」

太った体を揺すって、男は立ち上がった。

「かなしいが。都市伝説はいま、単なるデータ、真偽の値を固定されたデータでしかない。本来、都市伝説とは、常に変形し、融合し、また分離する物語だ。しかし、都市伝説を扱う書籍が増え、都市伝説はいつのまにか、人々の口ではなく、本を通って広まるようになってしまった。

『あるハンバーガー屋の肉はミミズの肉』……たったそれだけの記述は、もはや死んだ、ただのデータだ。真に迫った語り口、声の調子、話者の顔色、さらに

は話の細かい点まで含めて、話されるたびに微妙に姿を変える、だれにも確定することのできない都市伝説は、そもそも記述することができないもの。書籍に捉えられ、変化の余地を封じられてしまったものは、もはや都市伝説ではない。都市伝説とは、決して固定されない物語であり、近代まで生き残った、最後の、社会的なうわさだ」

黒いスーツを着た男は、窓際へゆつくりと歩いた。窓の外には、横転して煙をあげている車が、何台も見えた。

「わかるだろ。もはや、だれもが都市伝説のことを知っている。だれかが小さな創意で、都市伝説に新しい姿を与えたとしても、みんなが知っている死んだ都市伝説が、それを覆ってしまう。新しい都市伝説ができたとしても、その真偽がすぐに判定され、結果だけが広く伝わって、それでおしまい。現代では、都市伝説は衰えていく一方なのだ」

あくまでも静かに、男は語った。

「だから、都市伝説を今後も生き生きとしたものにするために、都市伝説に実体を与えたんだな。そして世間に都市伝説の印象を叩きこみ、またもとの、うわさに満ちた社会へ戻す」

直矩の言葉に、男は深くうなずいた。

「だが、それならなぜ、都市伝説に定まった一つの形を与える？ 可能性を限定してしまうって意味では、文字で表すのも、肉体を与えるのも、同じことじゃないか」

直矩は男の首すじを、ちりちりと見つめた。色素の薄い肌、静脈が走っているのがわかった。

「なんだろう。実は私にもよくわからないのだ。社会構造を変えると、大それたことをするには、並みの事件を超えたショックを与えなくてはならない。人々がいままで信じてきた現実を打ち破って、唯一の真実というものをぐらつかせなくてはならない。そうできれば、新たな都市伝説を否定する根拠がなくなり、都市

伝説は蘇る……だが、ね……」

どっしりとした男の体が身じろぎした。

「ほんとうは。見たかったのかもしれないな」

「見たかった？」

男は窓を覗いて、遠くに銀色の怪物を見つけた。男の目が細くなった。

「私の大好きな都市伝説が、こうやって暴れまわる様子を、見たかった」

満足そうにほほえんで、男は振り返った。そして、窓ガラスに近寄りすぎていたことを悔やんだ。もう少し離れていれば、ガラスは自分の顔だけではなく、背後の直矩の姿も映していただろうから。

直矩は小型の拳銃を構えて、男を狙っていた。

「おろかだな。私が拳銃の弾に当たって、死ぬと思うのかね？」

「ああ思うね。なぜならお前は、お前自身は、具現化した都市伝説ではなく、ただの人間だからさ。レオン・ベルチエ」
レオンは返事をしない。机を挟んで、直

矩は追及を続ける。

「都市伝説がどれだけ流転するものだとはいえ、ある都市伝説群と別の都市伝説群を区別するためには、なにか共通の特徴が必要だ。口が裂けた女が出てこない話を、口裂け女の話と呼ぶのはむりがある。だれがどう語ろうとも、ぜつたいに外せない重要ポイントが、都市伝説にはあるんだ」

直矩の長い足と腕は、レオンを撃つ姿勢を、ほぼ完全に保っていた。ふつうの日本人にできることではない。訓練を受けた人間の所作だった。

「自分を都市伝説化するために、お前は自分に枷を課した。そうだな？ 自分がどのように変化しても、その固定された一点があることで、同じタイトルがついた都市伝説として扱われる——お前は、話す日本語の初めの一文を、常に五文字ぴったりに収めていたんだ。それが、お前がお前自身を際立たせるために設定した、『オルレアン』という伝説の特徴

だ」

レオンは重々しくうなずいた。

「そのとおり。よく気づいたな」

「何でも頭の中で文字にして考えちまう、作家の職業病のせいだ。もしかしたら、こんなふうの世界を把握してるのは、俺だけかもしれんが——まあいい。つまり、もしお前が純粋に都市伝説なのだとしたら、どの発言でも五文字の一文から始まるはずだ。だがさつき、その原則が崩れた。『私の大好きな都市伝説が、こうやって暴れまわる様子を、見たかった』っていうのは、お前の心の深い部分が漏れた言葉だったんだろう。そしてそれゆえに、お前は自分で縛っていた演技を忘れた。お前は都市伝説『オルレアン』になろうとした、ただの人間、レオン・ベルチェだ」

レオンは指で顎の裏をぬぐった。

「それで、私を殺すのかね」

演技は完全に崩れた。

「ああ。お前がただの人間だとすれば、

都市伝説を具現化するためには、なにか道具が必要だ。金之助と同じように、ヘデモナから受け取った杖を、お前も持っているんだろう。お前を殺して、それを奪う」

「なぜ私なのだ。金之助の杖を使えばいいではないか。彼はきみの弟だろう。奪おうと思えばいつでもできたはずだ」
後ずさりするレオンの革靴のかかとが、壁に当たった。もうレオンに逃げ場はなかった。

「自由度が違いすぎるからさ。金之助のコーカイトイルは、午後四時から五時までのあいだ、しかも持っている書籍の引用でなければ使えない。だが、お前が持っている杖は違うはずだ。お前の杖は、物語を語りかけるだけで、それを具現化する——違うか？」

「それも作家の想像力の賜物かね」

レオンはため息をついて、胸ポケットからボールペンのようなものを取り出した。黒く光るその筒は、一秒ごとに表面の濃

淡を変えるので、蠢いているようにも見える。

「この幽玄の杖、エンドフアーフリは、都市伝説を語りかけることで、この世の現実の一部をねじ曲げられる。ヘデモナが私に与えた、世界と戦うための小さな武器だ」

奇妙な蠢きに目を注ぎながらも、直矩の銃口はびたりと狙いを定めていた。

「都市伝説だけじゃない。物語すべてだ。いいか、お前がいままで具現化させてきた物語を、都市伝説と決めているのは、どういう理由だ？ あれは、俺にはむしろ怪談の一部に見えた。都市伝説の特徴は、その普遍性、匿名性、複雑性など、物語の構造にある。だが俺自身の定義では、それに合理性が加わる」

「合理性、ね」

「そう。都市伝説は怪談と違って、現代の教育の進んだ一般人に浸透するために、科学の鎧を身にまとった。トイレで無意味な儀式をしても、妖怪が出てくるわけ

はない。だが、ハンバーガーの肉の材料はミミズだという話は、一般人を騙すことができる。現代人の頭から見ても、現実でありそうな事件の話——これが俺の考えていた、都市伝説の定義だった。だから花子さんに続いてジェットババアが現れたときは、正直言つて面食らったよ。もちろん、俺の勝手な定義が、だれにでも通用するとは思わない。だが、ということば、都市伝説とそうでないものを分けることなんてできないってことだ。定義が変われば都市伝説の意味も変わる。その杖は、だれかの定義に応じた都市伝説だけを選別するんじゃない。すべての物語を、現実のものにしてしまえるんだ。例えばお前が、ミミズバーガーの都市伝説から、巨大なミミズの怪物の物語を、新しく作り出したように」

レオンは手の中の黒い棒を、まじまじと新しいもののように見つめた。

「つまりこの杖で、ヘデモナと、神と同じことができると言いたいのか」

直矩はうなずかずに肯定した。

「なにか他の権力に依存することなく、自分の考えをそのまま世界に反映させることができる。世界を自由にできるはずだ」

レオンはエンドフアーフリを人差し指と親指でつまみあげ、目を細めながら、蛍光灯の光に当てた。レオンの丸い人差し指と、長さも太さもだいたい似ていた。

「それで、直矩さん、きみはこれを使ってどうする気かね？ 世界を自由にする権力を得て、なにをするのだ？」

直矩は唇を湿らせ、それから膝を少し内側にやった。

「俺は俺の勝手に生きたい。人間の自由意志を否定し、世界を個人に所属させる杖は、この世にあつてはならないものだ」

レオンは少しずつ手を下ろし、万年筆に似た黒い棒を、手のひらの上で転がした。

「きみは一つ勘違いをしている」

「勘違い？」

「そうだ。この杖は確かに、語った話を具体化する力がある。しかしそれは、へデモナの許可のもとにしかない、限定された万能だ。へデモナが認めなければ、なにも起こらない。きみが排斥したがつている、世界を支配するものは、この短い杖ではなく、へデモナ、つまり神なのだ。きみは神を抹殺できるのかね。概念としての神ではなく、実存する神を」

直矩は首を振った。

「わからない。だが、神の実存を知ってしまったら、人間には二つの選択肢しかない。真信するか、抹殺するか——俺は幸いなことに、神を信じなくても生きていける。もつと身近に、さまざまな信ずべきものがある。いまはそれで手いっぱいだ」

「その戦いに、この杖は何の役にも立たないことは、わかっているんだろうね」

レオンは黒く短い杖を、簡単な机の上に置いて、直矩のほうへ転がした。直矩は拳銃を下ろし、エンドアーフリを取り

上げた。

「どうして、俺にこいつを渡す気になったんだ？」

フランス人は肩をすくめて答えた。

「怖くなったのさ。私は世界を変えるつもりだった。だが、あまりに多くの人間を死なせすぎた……きみは傲慢だと言うだろうがね。これだけむちゃくちゃなことをしてきたのだから。都市伝説を生き続けさせるといふ、冷静に考えれば遊びのような目的のために、きみや金之助さんや、あの少女まで巻きこんだ。私はおそらく、その杖の力に酔っていたのだな」

目の前の男の、不徹底な高低がまとわりつく声をききながら、直矩は拳銃をしまった。

「しかし、その杖をなくした私は、ただの資産家の老人にすぎない。何人も人間が死ぬことに、心が耐えられなくなった。その杖を握りしめて、自分は世界の王者だ、自分は世界を自由にする権利が

ある、世界が自分に奉仕するのだ、そう私自身に言い聞かせても、怨嗟が毎晩のように責めさいなむのだ……私の生み出した都市伝説に生活を奪われた人間が、日ごとに増えていく数字となつて、毎晩この愚かな老人の思い上がりに食らいつくのだ」

直矩には、レオンがただの人間となつたのなら、これ以上追及する理由はなかった。へデモナ、つまり私の与えた大きすぎる力の前では、老人の積み重ねてきた長い人生など容易に吹き飛び、子供じみた支配欲だけが残つたのだつた。

また椅子に座つたレオンを残し、直矩は控え室をあとにした。莫大な権力を左手に収め、遠大な想像力を頭に収め、殺傷力をポケットに収め、作家は早足で歩いた。

「——この杖が、何の役にも立たない？ はたしてそうかな」

風が腕から脇をかすめ、上着を腹の表面で波打たせる。髪が後ろへ流れてしまったので、露出された額が冷たい。うつぶせに飛び上がった高橋は、遠くのほうで夕陽に映えている、紅白の鉄塔を眺めた。東京タワーの高さを思い出すと、途端に自分のいる場所の意味がわかって、高橋は大きく息をついた。前を見るために引っぱり上げていた首が疲れたので、高橋は力を抜いて地上を見渡した。影に覆われはじめた人工物の中で、屋上庭園の芝生の緑が目立つ。

テレビで見たスカイダイビングの真似をして、腕を曲げた形で前に出してみる。関節を曲げる角度によって、飛ぶ速さや方向を制御できるのだった。

だれもない中学校のグラウンドを左に見ながら、少し高度を落とすと、目に煙が入ってしみた。怪物によって事故を起こした車が、火を吹いているのだった。黒煙の臭いに喉を引っかかれながら、道路に沿って飛び、高橋は怪物を探した。

耳障りな咆哮が、高橋に怪物の位置を知らせる。怪物は夕日を受けて、奇妙に美しく輝いていた。歩道と道路の区別をせずに歩く怪物は、波型のオブジェの上に足をかけ、右手を払って街路樹のけやきを一本倒した。地下駐車場から出てこようとした高級車の上に、葉のない幹が倒れこんだ。

高橋はまっすぐに突進した。街路樹が、道路が、ぐいぐいと迫ってくる。歯を食いしばったが、風圧で顔が歪んだ。巻いたマフラーが口に貼りつき、息を吸いこめない。だが、空を自在に飛びまわれるという興奮の前では、多少の息苦しさは問題外だった。

高橋は両腕を顔の前で交差させて、戦うべき怪物との衝突に備えた。怪物は、潰れた高級車から這い出してくる新しい犠牲者を足元に見つけ、爪を持ち上げたところだった。高橋は大声をあげた。マフラーが乾いた唇をくすぐる。

怪物が高橋の急接近に気づいて、頭を

ひねる。長い銀色の尻尾が動き出す。高橋は肩をねじりながら、斜めの軌跡に体を乗せた。肉を切り裂こうと襲ってくる先端を、仰向けに飛んで避ける。尻に道路と擦れ合う感触がある。顔面すれすれを金属の鞭が通り過ぎる。マフラーにくるまれた自分の顔が、歪んで映って見える。高橋は肘から、怪物の右の腿の裏側へと突っこんだ。肘の腫が衝突でしびれる。相手の反応をうかがうほどの余裕はまだない。乱れた姿勢にかまわず、天へ一気に体を持ち上げてから、高橋はようやく怪物の様子を見た。遥か下で、怪物はバランスを崩し、路面に倒れこんだところだった。

「おし」

寒さと戦慄、さらに高揚がないまぜとあって、高橋の体をぶるりと震わせる。高橋がいなければ、そのまま肩をちぎりとられていただろう中年の男は、四つんばいになりながらその場を離れた。

右腰を落とすようにして、高橋はまた

地表近くへ下がった。魔法をかけられたとき頭に現れた、サイン入りの野球帽は、どこかへ吹き飛んでいてもおかしくないはずだが、頑固に頭に残っている。入り口を壊された交番の中に、倒れている男が見えたが、高橋にはそれに反応している余裕はない。怪物は確かに転びはしたが、巨体に傷は一つもついていないのだ。高橋は立ち泳ぎのようにして、体を空中に維持した。

怪物は敏捷に立ち上がると、素早い足運びで走り、両足を揃えて跳躍した。獐猛な怪物のつるつるした顔面が迫ってくる。斜めに飛び上がるだけでは足りず、高橋は慌てて頭を後ろにのけぞらせた。怪物の輝く爪の先端が、空中で高橋に覆いかぶさってくる。足をばたつかせながら、両手を頭の上に出し、海老反りになる。逆さになった腫にまともに夕日が差しこむ。高橋は反射的に足を縮め、膝を抱えた。怪物の指から伸びた巨大な刃は、股のあいだを通り過ぎていった。怪物は

憎々しげに歪んだ顔を高橋に向けながら、重力に引きずられ、また道路に戻った。着地の音は軽く、怪物がアルミニウムからなっていることを思い起こさせた。

仰向けのまま、しばらく頭のほうへ飛んで、怪物から距離をとる。背中で風を受け止めながら姿勢を縦に戻し、空を切って、高橋は宝石店の建物を一周した。建物どうしの狭い隙間を、体を縦にしながらかけると、獲物を捜す怪物の背中が現れた。足を後ろから前に振り出し、高橋はすくいあげるように強い蹴りを入れた。つま先や足首がきしむ。そのまま頭を下にして、垂直に舞い上がる。今度は、怪物が倒れこむまでの無様な格好が、しっかりと観察できた。うれしくなった高橋は、空中で逆さになったまま、拳を握ってガッツポーズをとった。

車を下敷きにして、仰向けに倒れた怪物は、大きな口を開けて牙を剥き出した。高橋はわざとそのすぐそばへ降りていった。立ち上がって高橋を追いかけながら、

怪物は爪や尻尾を次々に振り回す。その動きをだいたい飲みこんだ高橋は、つかず離れずの距離をとって、道路をまっすぐ進んだ。道路の上にかかった連絡ブリッジの直前でするりと高く舞い上がると、怪物は高橋を追ってきた勢いを削ぎきれず、連絡ブリッジに頭を激突させた。

へこんだアルミニウムの頭部が、徐々に膨らんで元に戻っていく。高橋はそれを少し離れたところで眺めながら、道路に足をつけた。地面を踏みしめると、ずっと宙に浮いていたかかとの不安が治まった。高橋は足踏みをして、重力を確かめた。自分の体は、やけにずつしりとしていた。

怪物はむくりと起き上がると連絡ブリッジの下に頭を突っこみ、瞳のない光る目をぎよろつかせた。展望台のある、五十四階建てのビルを、怪物は視界に捉えた。このあたりではいちばん高い建物である。

連絡ブリッジによじ登った怪物は、ま

た軽々と跳び上がった。高橋は身構えたが、怪物は高度よりも距離を稼ぎ、ビルの真下の駐車場に着地した。

「やばい」

そのビルの四十九階、本が大量にある場所を目指して、奈留と金之助はエレベータに乗っているはずだった。高橋の不安は的中した。怪物は、ビルの窓をいくつか爪で突き破ると、それを手がかりにして、ビルをよじ登りはじめたのだ。怪物の登る先には、高速で上下動する展望エレベータがある。外に面した壁はガラス張り、乗客は上昇しながら景色を眺められるようになっていた。

高橋は「正義の味方」超人マンの目を発現させて、遠くのエレベータシャフトの中を見た。見覚えのある、薄い色のダッフルコートが、まず見つかった。それを着た奈留が、緊張した面持ちで、金之助となにかを話していた。

舌打ちを一つして、高橋は猛然と体を傾け、怪物が取りついているビルへと向

かった。

(第五話へつづく)

※次回最終話です。